第三章 『江戸名所図会』に見る名所と遊楽

第一節 『江戸名所図会』に見る名所

(1) 文と挿絵

名所図会の中には、一つの名所を表現する方法が二つある。文字と挿絵である。図会の本文は、その名所の位置、名前の由来、内容などの情報を読者に伝えているのである。一方、図会の挿絵は、文字だけで伝えられない情報、例えばその名所の具体的な様子、雰囲気、そこに行く人々の姿をよりいきいきとした方法で表しており、文字の表現媒介としての不足を補っているのである。読者は、挿絵の提供した臨場感に自分の想像力を加えて、現場に行かなくても名所の魅力を感じ取ることができるのである。

この点に関して、『江戸名所図会』の絵師である長谷川雪旦は、自分の努力について高い評価を受けているのである。同時代の知識人である滝沢馬琴 (1767-1848) は『異聞雑稿』の中で、

江戸名所図会はその功、編者に四分にして、その妙は画にあり、遠境の婦女子の大江戸の地を踏むに由なきには、これにます玩物あるべからず⁸⁰ (略)

と述べている。馬琴は、雪旦が『江戸名所図会』の中に達成したものは、四十年間に近い努力していた著者である斎藤家の三人にも勝ったと考えていたのである。

凡例の中には、挿絵について、

神社仏閣の幅員方域を図するは、専ら当今の形勢を模写す。且つ地図の間に四時遊観の形勢を絵くに、その態度・風俗・服飾・容儀、これ亦当今の形容を図す。旧地に基づいて画するものは、各々時を分てり。これその地の風光を潤色して、他邦の人をして東都盛大の繁栄なる事を知らしめ、且つ童蒙の観覧に倦む事なからしめんが為なり。⁸¹

と説明されているのである。

^{80 『}続燕石十種 第二』1909年、33-34頁

^{81 『}江戸名所図会』、凡例、26 頁

『江戸名所図会』では、文字の記述と挿絵の表現と、この両者のどちらが主役であるかとは言いにくい。だが、挿絵は文章の付属する存在ではないことは肯定できる。すべての名所に対応する挿絵が見つかるわけではないのである。すべての挿絵に対し、その絵に描かれた名所を説明する名所項目が存在しているわけでもないのである。つまり、挿絵だけある名所と文章だけある名所が、両方存在しているのである。いままでの研究では、本文と挿絵と分割して扱っている⁸²。斎藤家の取り上げた名所は、1043 件があることはよく言われているが、実際にこの数字より多いのである。挿絵の働きについて、『江戸名所図会』の凡例では、文字の著者側の説明は見られるが、挿絵を描く絵師側の考え方は記していない。

(2) 収録の地域範囲と名所の数量

『江戸名所図会』では、名所⁸³として立項されたのは、総計 1043 件である。 挿絵は、656 景である。扱った規模で言えば、名所図会ブームを引き出した『都 名所図会』に遥かに超越しているのである。収録の地域範囲について、「江戸」 と題しているが、実際は、東は市川、西は所沢、南は金沢、北は大宮に及ぶ範 囲を含んでいる⁸⁴。江戸名所案内記の系譜の中に、『江戸名所図会』が「集大成 ⁸⁵」という重要な位置を占めている理由には、扱う範囲の地域的な広がりも一 つであると言える。

名所案内記に実用性を追求するのは、当時の普遍的な習慣であるようであるため、『江戸名所図会』も実用面を重視し、物語性を持っていない作品である。読者が名所を調べるときに辞書的に使われていた可能性⁸⁶はないとは言えない。しかし、特異な名所の配列方法は、『江戸名所図会』を辞書として使おうとする読者には挫折感を多少感じさせたこともあろう。

凡例の中に、七巻二十冊全作の構成について、

この編の次序は、大城を以つて首とし、余は南方に回環するまで、北斗七星の位に配当して、すべて七巻を以つて全部とす⁸⁷。

⁸² 千葉正樹氏の著した『江戸名所図会の世界』は、挿絵を中心にし、金子晃之の「近世後期における江戸行楽地の地域的特色」も、挿絵の分析を行った。鈴木章生の『江戸の名所と都市文化』には、『江戸名所図会』に関する分析がそれなりに多くないが、主に本文の項目を中心にし、分析をしていたのである。

⁸³ ここでいう「名所」は、『江戸名所図会』の著者に「名所」と呼ばれたものを指す。必ずしも一般的に思った名所ではなく、。場所にも限らない。例えば、巻三に「除蝮蛇の神符」という名所項目がある。

^{84 「}近世後期における江戸行楽地の地域的特色」、37頁の図による。

⁸⁵ 鈴木章生『江戸の名所と都市文化』、102 頁

⁸⁶ 斎藤智美「名所図会の成立と受容-『江戸名所図会』を手がかりに-」、85 頁

^{87 『}江戸名所図会』、凡例、25 頁

という説明が見られる。

さらに、収録された名所が膨大な数量になっていることには、

江戸の地は、広大盛壮にして、名流高士の芳躅は蔚然として史冊を照曜し、 琳宮梵刹は林の如く聯なりて、悉く数へ挙ぐるに遑なし、故にその中にも 由致あるを選びて録す⁸⁸。

として、由緒のある名所を選択すると基準を書いている。

選ぶ基準とは言いながら、実際に名所図会の内容と対照して見ると、「由致ある」という基準に符合する名所は一部しかない。一見無理矢理に名所として収録したことは、『江戸名所図会』だけではなかったであろう。松平定常は、『江戸名所図会』のために書いた序文の中に、名所を取り上げることについて、

余謂凡名所之称。本出於和歌者流。蓋其設法謹厳画一。縱令有山秀水麗。 足以吟咏。而其不為古歌所取者。不得称之名所。矧秋里氏之撰。非惟所謂 名所而已。神祠仏寺。説係恠誕。紫陌綺街。事渉猥瑣者。亦網羅而不遺乎。 矧復江戸之為地。武野之曠。秩嶺之峻。墨流之永。玉川之澄。絡繹邦域。 霞關忍岡之宜春。真土菴崎之宜秋。衿帶郊垌。其勝殆不譲上國乎。是亦何 病之有。⁸⁹

と述べている。

本来、和歌に詠まれているものだけが名所と称されるが、秋里籬島の撰した著作には、名所だけでなくくだらないものも網羅的に収録された、と松平は批判している。それに次いで、江戸には都のいわゆる名所に負けないくらいの所が多くあり、同じく名所と呼ばれても良いと言っている。

秋里籬島は、1780年に都名所図会を著した後、驚異的なスピードで、大和名所図会(1791)、住吉名所図会(1794)、和泉名所図会(1796)、摂津名所図会(1796)、東海道名所図会(1797)、都林泉名所図会(1799)などの各地の名所図会を連続して出版していた。同じ著者の手で世に出したもので、同じ基準で名所が収録されたと考えられる。その上、このように名所図会を次から次へ出版できたのは、秋里の名所に対する扱い方を当時の読者が気にしなかったというより、むしろ大衆に好まれたと考えられる。この現象に基づいて、斎藤家

^{88 『}江戸名所図会』、凡例、25 頁

^{89『}江戸名所図会』上巻、松平定常の序、13頁

もこのように名所をできるだけ多く収録した可能性もある。

(3) 地域的な特色

では、千件を越えた名所にはどのような内容が入っているかを見てみよう。 鈴木章生は、『江戸名所図会』に立項された名所を、「寺・堂」「寺社・祠」「墓碑・塚」「川・池」「橋」「山・丘」「坂」「その他地名」などの八類に分けている⁹⁰。そして、数量の統計を通し、仏閣神社のような宗教関係の名所は総計約56%を占めているという結果を発見した。一方、金子晃之は、『江戸名所図会』の挿絵を行楽地の描写とし、「宗教関係」「社会関係」「自然関係」「歴史関係」などの四大類に分けている⁹¹。各類別の割合を明らかにし、宗教関係に属する行楽地は、約61%を占めているという、鈴木章生と類似した結果を発見した。この共同的な発見で、『江戸名所図会』に表したその時の江戸には、宗教地が名所としても行楽地としても重要な役割を果たしていたことが分かる。

さらに、金子晃之は、挿絵の地理的な分布を根拠にし、『江戸名所図会』の各巻に書かれている名所の地域的な特色について、次のように指摘している。巻一に該当する江戸の主な町人居住地域には、社会関係の名所が多い。一方、巻二~巻七の地域には、名所が主に寺社地であり、巻一地域の周辺に位置し、江戸の郊外にまで続く。巻二~巻七にある名所の特色は、全作の特色に大体一致していると言える。しかし、巻一に取り上げた名所は、それなりに特別な意義を示していると考えられる。

(4) 名所項目の本文と挿絵の配列

巻一に名所として立項されたのは 132 件あり、挿絵は 95 景ある。最初の 20 件の名所項目と、その間に挿入された挿絵の配列関係は次のようである。

(①、②、③などの表記は本文を指す。a.b.c などの表記は挿絵である。)

①武蔵、a. 日本武尊東夷征伐図、b. 「江戸東南の市街より内海を望む図」、 ②江戸、③江戸大城の基立、c. 「元旦諸侯登城之図」、④吹上御庭、⑤松原小路、⑥梅林坂、⑦八代曾河岸、d. 「八見橋」図、e. 「日本橋」図、f. 「日本橋魚市」図、⑧龍の口、⑨道三橋、⑩銭瓶橋、⑪常盤橋、⑫一石橋、g. 「駿河町三井呉服店」図、⑬日本橋、⑭魚市、⑮祇園会御旅所、h. 「本町薬種店」図、i. 「大伝馬町木綿店」図、⑯通町、⑰浮世小路、⑱十軒店、⑲時の鐘、j. 「祇園会大伝馬町御旅所」図、k. 「小舟町祇園会御旅所」図、1. 「堀留」図、

57

⁹⁰ 鈴木章生『江戸名所と都市文化』、120頁。

⁹¹金子晃之「近世後期における江戸行楽地の地域的特色」(『歴史地理学』雑誌 176、1995 年) 22-28 頁。

- m. 「伊勢町河岸通」図、n. 「十軒店雛市」図、20福田村の旧跡
- ① 武蔵と②江戸には、地理的な位置の説明から始まるのである。それに次いでは、地名についての長い歴史考証と書籍からの引用文である。②江戸の最後には、

万国列侯の藩邸、市廛商賈の家屋鱗差して、縦横四衢に充満し、万戸千門 甍を連ねたり。実に海陸の大都会にして、扶桑第一の名境といひつべし⁹²。

という注解を江戸の地に斎藤家がしたのである。武蔵の項目以外、全作の序幕 として巻一にある 131 件の名所を引き出したのである。

d.「八見橋」図から、本格的に町方についての記述が始まる。次から来る名 所項目は、すべて町人の生活する地域にある場所であり、文字記述には文の長 さが短いという傾向がある⁹³。挿絵の表現には、低視点の近距離の描写が多い⁹⁴。 絵師が近距離の視点でこれらの町人地にある場所を扱った理由は、市街景観の 規模は比較的に小さかったからであると考えられる。

以前の名所案内記と比較すれば、市街景観を名所として取り上げたのは、『江戸名所図会』の特色であるといっても良い。当時から170年前の『江戸名所記』では、全くなかったからである。この間に、社会大衆の名所観は大きく変化した⁹⁵。

(5) 市街類に属する名所

市街景観を描いた挿絵の中にで注目されるのは、g.「駿河町三井呉服店」図、h.「本町薬種店」図とi.「大伝馬町木綿店」図である。この三枚の挿絵は、 共通点が幾つある。

第一は、相関する文字の記述がないのである。第二は、前述のように、低視点で近距離に描かれたのである。近距離の描写だといっても、絵に表れた店は、のれん・屋号まではっきり見える程度に細かく表現されていた。

この挿絵に関して、斎藤月岑の残した『江戸名所図会の由来』に関連する情報が見られる。

一 雪旦の絵、幸孝没後に残りしは、初めの諸侯登城の図、日本武尊、お

^{92 『}新版 江戸名所図会 上巻』、47 頁。

^{93 20} 個の名所には、字数は皆 500 字に越えていないのである。

⁹⁴日本武尊東夷征伐図の古事に関する挿絵を除き、13 枚の挿絵には、低視点の図が7枚ある。 95 金子晃之「近世後期における江戸行楽地の地域的特色」(『歴史地理学』雑誌176、1995年) 28 頁。

玉が池の古事、井の頭、日本橋、両国橋其外七、八枚なり。

一 江戸市中の細図初めへ出せしは雪旦の案じ也。地取は大方幸孝の好みなり⁹⁶。

ここの史料から、挿絵の部分は大部分斎藤月岑の父である幸孝の代に、完成 したことがわかる。市街景観を描くのは、絵師雪旦のアイデアであるが、場 所の選択は幸孝である。

これらの挿絵に最後に表現した様子から見て、幸孝が本当に気に入った店であったため、のれん・屋号までの細かい部分も『江戸名所図会』の挿絵に描かれたとはいっても、編纂者と店の人との間に、現在のスポンサー関係に類似する支援行為があったのではないだろうか。

挿絵に関する場所の選定は不明な状態であるにもかかわらず、写実性が比較的に高い絵は、今だけではなく、当時の人からも良い評価を得たのである。挿絵の価値を肯定していた滝沢馬琴は、『江戸名所図会』を読んで、友人への手紙で短い感想を書いた。

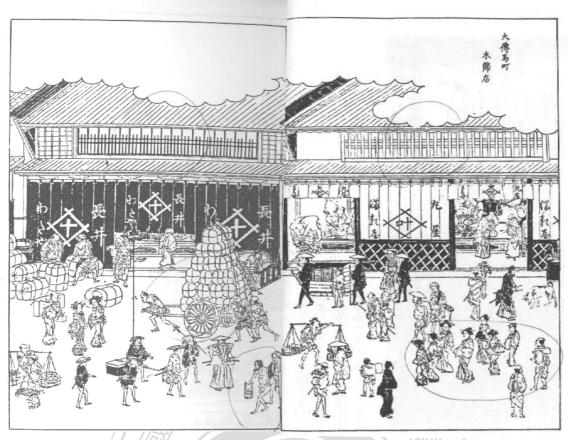
貴地の御婦人方抔、江戸を御覧被成がたきにハ、此上もなく御慰ミニなり候半と奉存候。江戸に生候ものゝ目より見候へバ、めづらしげなく候。何事も遠きが花のながめに御座候。江戸とハいへど、武州一国の事をあらまし録し候間、江戸の事より、却近郊の事ニは、是迄聞しらぬ河崎の新田大明神、亘新左衛門早勝の墓抔、かやうのるいも往々見へ候。熟読いたし候ハバ、宜キ事も可有之候へども、何分さるいとまなく(略)残念ながら熟読不致候。⁹⁷

/enach\

馬琴は、『江戸名所図会』は江戸以外に住んでいる人にとっては、良いものであるが、江戸生まれの人にとっては珍しいものではないと思ったのである。そして、馬琴は近郊部分のほうが気に入ったことがわかる。言い換えれば、馬琴が珍しいと思わなかったのは、江戸市中の部分である。

^{96 『}江戸名所図会事典』、35 頁

⁹⁷ 柴田光彦・神田正行『馬琴書翰集成 第3巻』、2003、八木書店、142頁 (斎藤智美、「『江戸名所図会』の成立前後について」からの再引用)



(図五) 大伝馬町木綿店



(図六) 本町薬種店

第二節 『江戸名所図会』に見る遊楽

江戸時代後期の人は、『江戸名所図会』を読むときに、ある名所では何が楽しいのかを知りたかったら、まずは図会にその名所項目を見つけて、条下を読んでいくのである。やや漠然と書いてある(特に「他邦の人」にとって)名所位置を終わると、次はその地の歴史、または冗長な古書からの引用した文が来て、最後に遊楽に関する段落がやっと現れてくる。この遊楽に関する段落を探す過程は、まるで一般人の送っている毎日の生活の流れのようである。つまらないことを長時間我慢して、やっと楽しい部分にたどり着く。

巻一の「両国橋98」を例にして見てみよう。

(1) 両国橋 浅草川の末、吉川町と本所元町の間に架す。

『江戸名所図会』に取り上げられた名所では、両国橋の位置ははっきりしているほうである。だが、そこを訪れようとすると、地元の人ではないと、江戸に入ってから何とかして道を聞くしかないと考えられる。

長さ九十六間(橋の前後並びに橋上に番屋をすゑてこれを守らしむ。)万治二年己亥官府より始めてこれを造り給ふ。(『三橋記』或いは云ふ、寛文元年辛丑新たに両国橋を架けしめらる。御普請奉行、芝山・坪内両氏に命ぜられしと云々。旧名を大橋と号す。『事跡合考』に、万治二年東の大川筋に、始めて大橋一ヶ所をかけらるゝ、とあるもこの橋の事なり。又『むさしあぶみ』といへる草紙にも、この橋を大橋としるしてあり。『事跡合考』に云ふ、この橋の形は扇を開きたるにかたどると云々。)その昔この川を国界とせしにより、両国橋の号ありといへども、今の如く利根川を以つて界と定め給ふより、後は本所の地も同じく武蔵国に属すといへども、橋の号は唱へ来るに任せてその儘改められずとなり。(或人云く、貞享三年丙寅春三月、利根川の西を割りて武蔵国に属せしめらるゝと云々。)

本文の半分以上を占めているこの段落には、三冊の古書から、両国橋の歴史 や由来に関連することが引用されているのである。この文を書くために、著者 は煩雑な過程を経ていたに違いない。時々、引用文の後に「按ずるに…」とい う形で、さらに自分の考証を加えている。著者の苦心は想像できる。だが、著

⁹⁸ 『江戸名所図会 上巻』、128-129頁。(ここは、理解しやすいため、便宜的に段落に分けている。本文は、段落に分けていない。)

者の努力のために『江戸名所図会』は「俗書⁹⁹」という評価を脱出したわけではなかった。

この地の納涼は、五月廿八日に始まり八月廿八日に終る。常に賑はしとい へども、就中夏月の間は、尤も盛んなり。陸には観場所せきばかりにして、 その招碑の幟は、風に飄りて扁翻たり。両岸の飛楼高閣は大江に臨み、茶 亭の床几は水辺に立て連ね、燈の光は玲瓏として流れに映ず。楼船扁舟所 せく、もやひつれ一時に水面を覆ひかくして、あたかも陸地に異ならず。 絃歌鼓吹は耳に満ちて囂しく、実に大江戸の盛事なり。

最も期待されているであろう部分が、やっと最後に来る。遊楽の場所の 楽しい雰囲気は、文字でどのくらい書かれても足りないのではないだろうか。 絵師は、夜の両国橋を選定し、その場で花火を見ながら、涼みを楽しんでいる 江戸の人々の姿を生き生きと描いている¹⁰⁰。編纂者たちは、三頁にわたった一 枚の図で、読者にもっと真実に迫る想像を残すことにした。

この人数船なればこそすゞみかな 千人が手を欄檻やはしすゞみ このあたり目にみゆるものみなすゞし 其 角 同 蓝

本当に最後の最後は、余韻として文人の作品が置かれている。風雅なしまい 方で斎藤家の文化人としての一面が見られると考えられる。

一方、「両国橋」のような条下に遊楽について詳しく紹介されているのは、 すべての名所についてではない。そこにはもちろんその地の楽しい雰囲気を伝 える挿絵も、付けられていないのである。この節では、『江戸名所図会』に現 れている遊楽の部分を中心にして扱いたいと思う。

『江戸名所図会』に遊楽の環境として紹介に触れられている名所は、大半宗 教地と郊外の自然地に集中している。例としていくつかの名所を見ていきたい と思う。

(2) 目黒不動堂 (略) この地は遥かに都下を離るるといへども、詣人常に絶えず。殊更正五九の月二十八日、前日より終夜群参して甚だ賑はへり。又十二月十三日は煤払にて開帳あり。これも前夜より参詣群をなせり。門前五六町が間、左右貨食店軒端をつどへて詣人をいこはし

⁹⁹ 滝沢馬琴

^{100 『}江戸名所図会 上巻』「両国橋」図、130-132頁

む。栗餅・飴、および餅花の類ひを鬻ぐ家多し¹⁰¹。 (「目黒飴¹⁰²」、「目黒不動堂¹⁰³」二図)

(3) 神田大明神の社 (略) 祭礼隔年九月十五日 (江府神社の祭礼は、永田馬場山王を第一とし、当社これに次ぐ。いづれも公よりの沙汰として、練物・楽車等、善尽し美を尽し町中を引き渡す、これ一時の荘観なり。この日都下の貴賎桟敷をかけて見物す。)(略) 当社の境内常に賑しく詣人たゆることなし。茶店各岸に臨んで、遠眼鏡などを出して風景を翫ぶのなかだちとす。殊更近来は瑞籬に桜樹をあまた植ゑければ、弥生の頃最も美観たり¹⁰⁴。

(「神田明神社105」、「神田明神祭礼106」二図)

(4) 金竜山浅草寺 (略) 抑当寺は、一千百七十有余年を経るの古刹にして、実に日域無双繁昌の霊区なり。その霊験の著き事は普く世に知る所なり。常に金鈴玉磬の響絶えず。焼香散華の勤行怠る事なし。朝より夕に至るまで参詣の貴賎袖を連ねて場に充ち満てり。毎更月毎の十七日には、通夜の緇素堂中に参籠して、終夜誦経念咒怠慢なし。又境内売物の数多きが中にも、錦袋円・浅草餅・楊枝・数珠・五倍子・茶筅・酒中花・香煎・浮人形の類、殊に浅草海苔はその名世に芳し、手遊び・錦絵等を商う店軒をならべたり。他邦の人ここに至りてその繁昌をしるべし107。

(「金龍山浅草寺全図108」、「楊枝店109」図)

以上の三例は、江戸または江戸の周辺にある寺社である。遊楽に関する内容から見て、当時の寺社は現代の人の想像している宗教地とはかなり違っていることが分かる。

まず、文字の記述からは知ることができない特徴から見よう。境内が描かれ

^{101 『}江戸名所図会 中巻』、122 頁。

^{102 『}江戸名所図会 中巻』、118-119頁。

^{103 『}江戸名所図会 中巻』、120-121 頁。

^{104 『}江戸名所図会 下巻』、20、32 頁。

^{105 『}江戸名所図会 下巻』、22-23 頁。

^{106 『}江戸名所図会 下巻』、24-31 頁。

^{107 『}江戸名所図会 下巻』、265、266 頁。

^{108 『}江戸名所図会 下巻』、220-229 頁。

^{109 『}江戸名所図会 下巻』、246 頁。

[「]金竜山浅草寺」に関連する挿絵は、また「六月十五日祭礼之図」、「節分会」図、「兵藤平内 兵衛・二王座禅像」図、「鎌田政清造立穴地蔵石燈籠」図、「一権現祠・が池」図、「十二月十 八日年の市」図、「馬市」図、「浅草寺観音大士の出現」図、観音大士安置の図などの9図があ る。

ている挿絵は、三枚とも俯瞰図である。規模が広い地域を捉えるように、絵師は高視点に立ち、寺社の全域を一枚の絵に入れ、読者に快かつな感覚を伝えようとした。特に浅草寺の境内は広すぎて、連続する絵で何頁も続いている。そして、広い面積を占めているので、境内には花や木などの植物が数多く生い茂っているようである。参詣に行くと同時に、自然景観を目で楽しめるのである。さらに、寺社の付近には商売をする店が並んでいるようで、お菓子、食事なども楽しめるのである。浅草寺の境内には、おもちゃ、錦絵さえも売っているのである。この面から見て、浅草寺はおそらく当時の子供たちにも人気が高かったのであろう。

当時の寺社は、『江戸名所図会』に表現されるように、心身の安息をもたらす信仰機能を持っているだけでなく、人々の精神生活における多様な需要を満足させる場所でもある。この複合的な功能について、鈴木章生は「立地要素、宗教要素、歴史要素、世俗要素¹¹⁰」という寺社の持っている四種類の魅力でまとめている。ここから、神社仏閣の宗教地は江戸の人々の遊楽生活に重要な一部であることがわかる。

- (5) 御殿山 (略) この所は海に臨める丘山にして数千歩の芝生たり。殊 更寛文の頃和州吉野山の桜の苗を植ゑさせ給ひ、春時爛漫として尤も 荘観たり。弥生の花盛には雲とまがひ雪と乱れて、花香は遠く浦風に 吹き送りて、磯菜摘む海人の袂を襲ふ。樽の前に酔ひを進むる春風は 枝を鳴らさず、鶯の囀りも太平を奏するに似たり¹¹¹。(略) (「御殿山看花¹¹²」図)
- (6) 井頭の池 (略) この池は清泉にして、炎天にも水の減ずる事なし。 常に泌沸として湧出す。その地最も閑寂にして、池辺柳樹多く、初夏 の頃に至れば新葉黯々として陰をなし、浅翠嬌青碧空を蔽ふに似たり¹¹³。 (「井頭池・弁財天社¹¹⁴」図)
- (7) **隅田河の堤** (略) 官府の命ありて、三囲稲荷の辺より木母寺の際まで、堤の左右へ桃桜柳の三樹を植ゑさせられければ、二月の末より弥生の末まで、紅紫翠白枝を交へ、さながら錦繍を晒すが如く、幽艶賞するに堪へたり。また菫菜・砕米菜盛りの頃は、地上に花氈を敷くが

^{110 『}江戸の名所と都市文化』、223 頁。

^{111 『}江戸名所図会 上巻』、354-355 頁。

^{112 『}江戸名所図会 上巻』、352-353 頁。

^{113 『}江戸名所図会 中巻』、552 頁。

^{114 『}江戸名所図会 中巻』、550-551 頁。

如く一時の壮観たり¹¹⁵。 (「隅田川堤春景」図¹¹⁶)

寺社に次いで出て来る三例は、江戸市中から少し離れていると思われる場所である。この三つの名所の共通点は、昔から今までの都市住民が皆持っている渇望を象徴している。一つの地域の都市化に従い、一般人には、個人が所有する生活空間が次第に狭くなってくる。人と人との間に、生理的と心理的な摩擦が増える傾向がある。自然に親しむことを通し、生活にもたらされた不安と焦燥感を解消することは、もっとも合理的だと考えられる。

しかし、『江戸名所図会』の他の挿絵にも見られるのは、自然に親しもうとする人がいつも想像より多いのである。どのくらいの焦燥感を解消できるかという疑問はあるが、別の観点で考えれば、他人との間に摩擦を生ずるのは本当に避けられないことだったら、綺麗な花が咲いている場所のほうがやはり楽しいのではないだろうか。

(8) 新吉原遊女町 (略) この花柳はまことに三都の魁たり。その賑は特弥生の花の頃をもて勝れたりとし、春宵一刻の価千金を顧みず、初秋の燈籠は万字屋の玉菊が追福にはじまり、八朔の白重は巴屋の高橋に起る。今もこの日をもて更衣の節とす。名にしおふ二度の月見の全盛はいふもさらなり。悉くその美を挙ぐるにいとまあらず、しばらく此処にこれを略す¹¹⁷。

(「新吉原町118」図、「新吉原仲之町八朔図」119)

最後に例として取り上げた新吉原は、この地の特色が他の名所に対して普遍的なものだとは言えないが、当時の遊楽活動には不可欠な一つだと思われる。 浮世絵をはじめとし、歌舞伎、文学などの数え切れない芸術作品は、この場で生まれたのであると言っても良い。

斎藤家が吉原を名所として記述している内容も、朦朧とした感じがする。特に最後の「悉くその美を挙ぐるにいとまあらず、しばらく此処にこれを略す」という終り方は、他の名所項目にはなかった。また言いたかったが、でも言えないという気持が溢れているようである。

吉原の条下で見られない部分のように、『江戸名所図会』には、編纂者が言

^{115 『}江戸名所図会 下巻』、639 頁。

^{116 『}江戸名所図会 下巻』、636-637 頁。

^{117 『}江戸名所図会 下巻』、430 頁

^{118 『}江戸名所図会 下巻』、424-425 頁

^{119 『}江戸名所図会 下巻』、426-427 頁

ってない部分はまたあると考えられる。一つの創作として、最終的に表された イメージは、必ず著者の意識に関わると考えられる。『江戸名所図会』も、も ちろん例外ではない。ただ、『江戸名所図会』にある名所に対しての網羅的な 収録と挿絵の写実性の追求のため、読者にはその中にある真実ではない部分と 編纂者が言わないことにした部分は無視されやすいものになるであろう。

小結

斎藤家が『江戸名所図会』の中に収録した名所は、実際は立項された 1043 件より多い。これは名所の項目は文字の描写だけで、挿絵だけある名所は項目が立てられていないからである。挿絵だけある名所には、市街類の名所が注目されていると考えられる。以前の江戸名所案内記では、全くなかったからである。これは斎藤家の人々が市街景観(特に商店)を名所として強調したことを反映している。このことは、市街景観を見ることが当時の人々に江戸の名所廻りの一部に入れられている可能性がある、と考えられるのである。

さらに、宗教関係の名所が半数以上占めている。これは当時江戸に住んでいる人々の遊楽生活が寺社などの宗教地と強く結ばれていることを反映している。次は、自然地である名所が多い。江戸の人々は、自然を楽しむことで生活にもたらされた不安と焦燥感を解消する。その上、新吉原遊女町も『江戸名所図会』の中に現れている。これは、江戸の遊楽の中に著者の斎藤家が詳しく説明しようとはしていない部分を代表する。

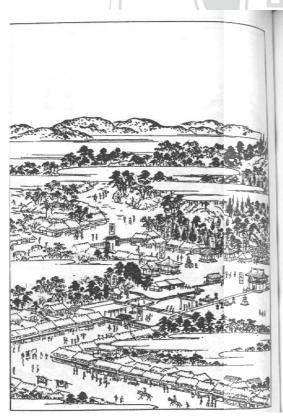
本章では以上のことを明らかにした。

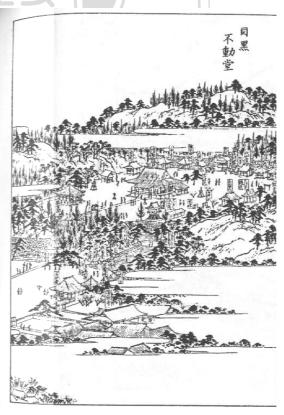
Chengchi



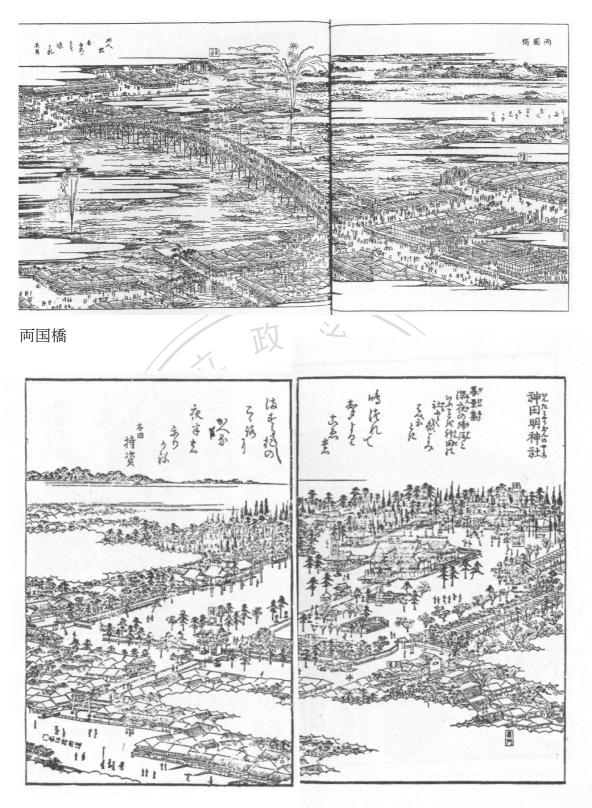


「目黒飴」図





「目黒不動堂」図



神田明神社図